

<書評論文>

日本文化における基礎低音と超越性の葛藤

—— 比較枠組の再検討 ——

R. N. Bellah,

Imagining Japan: Japanese Tradition and Its Modern Interpretation.
(University of California Press, 2003)

木 村 至 聖

はじめに

プロテスタンティズムの精神に西洋資本主義の萌芽を見出したM. ウェーバーの最後の仕事は、比較宗教社会学という枠組によって一つの大規模な普遍史を描き出すことだった。残念ながらこの壮大な試みは彼の死によって中断されてしまったが、彼に続く多くの比較社会学や比較歴史学の研究者たちがこのテーマを引き継いだ。なかでもロバート・ベラーの『徳川時代の宗教』（1957）は、その試みを日本に適用した佳作である。このベラーが半世紀の時を経て自らの日本研究を再構成し、さらに新たな考察を加えた論文集が本書である。

ここでは主に1960～70年代に書かれた論文が掲載されているが、第1章は鎌倉仏教について、第2～5章はそれぞれ家永三郎、和辻哲郎、丸山眞男、聖徳太子から現代に至る日本の知識人についての既出論文であり、同じく既出の第7章は『徳川時代の宗教』でなされた日本の価値システムについての考察を、さらに歴史を遡って深めたものである⁽¹⁾。また、第6章は本書が初出であり、母としての天皇像について考察している。

それぞれの章で内容の重複がみられるが、著者は書き下ろしの序文（本書全体の約3分

⁽¹⁾ 筆者は第5・7章について、これらは当時アメリカで有力だったものの今日では批判に晒されている機能主義的日本研究を代表する論文であり、それをオリジナルな形で掲載することで機能主義的日本研究への誤解を解き、かつ再考を加えることを意図したという。

の1を占める)でその議論を再構成し、さらに検討を加えているので、本書評ではこの序文の流れに沿いながら、適宜他の章についても触れていきたい。また、ここでのもう一つの関心は、長らく日本研究を離れ、近年はアメリカ個人主義の研究者として知られていた著者が、なぜ今再び日本について語るのかということである。『徳川時代の宗教』から約半世紀が過ぎ、世界情勢も大きく変化し、日本研究についても新たな研究がなされている。このような様々な経過を、著者はどのように見るのだろうか。

1. 丸山眞男とベラー ― 近代化の内実をめぐって

『徳川時代の宗教』でベラーは、日本を「他者」と捉えるのではなく、一定の比較枠組の中で他の近代社会と類似点を共有するものとして理解しようとした。この論文では基本的枠組としてパーソンズのパターン変数が用いられ、日本社会とアメリカ社会において優勢な価値体系を、それぞれ個別主義と業績主義、普遍主義と業績主義と特徴付ける。その上で、彼は日本においては近代の前兆となるようなプロテスタント革命の機能的等価物があったとし、それを徳川時代の宗教や民衆道徳に見出そうとしたのである。

この著作に対し、誰よりも鋭い反応を示したのは丸山眞男である。丸山は1958年の『国家学会雑誌』における書評で、その問題関心の明確さ、概念規定の厳密さ、その系統的使用について称賛しているが、その「「演繹的」な方法に強い心理的な抵抗を覚え」、「アメリカ社会をモデルとした」パーソンズ理論の適合性についても疑問を呈している(丸山1958:282)。そして「著者の「方法」を前提としても、徳川社会の価値体系からむしろ著者と異なった意味づけを引き出せるのではないか」(丸山1958:284)という痛烈な批判を浴びせた。彼によれば、ベラーが日本社会の合理化・産業化の指標として示したものは、「呪術からの解放」という単線的な発展のコースではなく、明治から戦後にかけての天皇制に表れたように、その後の日本の発展に非合理的な結果をもたらしたとも考えられるのである。

以上のような批判にベラーはどのように応えたのだろうか。「近代日本における価値意識と社会変革」(1962)では、丸山の指摘を受けて、近代以降の日本文化の伝統がはらむ負の側面について批判的に検討している。だがこの時点では、日本の近代化はその戦後の経済的な発展を見れば明らかであるとしており、また、「日本の知識人と社会」(1971, 本書第5章)や「日本社会の連続性と変化」(1971, 本書第7章)では、徳川時代以前に遡りながら、近代化の萌芽となりそれを支えた日本文化の超越性の伝統をたどることで、日本が近代化に成功したという側面をより強調している。

しかし、1985年の『徳川時代の宗教』ペーパーバック版まえがきでは、いくらか葛藤が見られる。最初の出版から30年近くが経ち、近代社会の病理が様々な形で噴出し、彼の前提としていた近代化理論自体の弱点も露呈されることになった。「私の見落とししたのは、富と権力の限らない蓄積からは良い社会が招来しないどころか、むしろ発展し得るどの社会にも必要な諸条件が否定されがちなことである。私は、目的と手段を取り違える過ち、すなわち手段を目的にしてしまう過ちを犯してしまった」(Bellah 1985: 邦訳26)と彼は書いている。また、丸山を追悼して書かれた本書第4章所収のエッセイ(1996)では、近年は倫理的個人主義と民主主義という観点で、ますます丸山に接近していったという著者の心境が書かれている。

2. 非軸的nonaxialな日本

続いて、以上のような近代の意味の問い直しの中で、ベラーが従来の分析枠組にどのような再検討を加えていったのか、いよいよ本書の内容に入ってみていく。

前節でも触れた通り、彼は日本の特異性を主張するだけでなく、日本を比較の領域に位置付け、その基本的枠組を発展させることの重要性を説く。ここで彼がその分析枠組に据えるのは、アイゼンシュタットが『日本の文明』(1996)で用いている軸文明Axial Civilizationsという概念である。そもそもこの概念は、K. ヤスパースが、紀元前の最後の千年紀というほぼ同時期に世界各地で預言者や救世主が出現し、「呪術宗教」をラディカルに合理化するという現象が起こったことに注目し、この時期を「軸の時代Axial Age」と呼んだことに由来する。アイゼンシュタットはこれを発展させ、その時代に出現した世界宗教を軸の宗教と呼び、それに関係した文明を軸文明と呼んだ。つまりこれは宗教の合理化の度合いによって、文明を大きく軸の以前と以後に区別する考え方なのである。

さらに、この軸概念に基づいた比較枠組を発展させるために、著者は「基礎低音ground bass」という概念を用いる。この概念は「近代日本における価値意識と社会変革」(1962)で初めて提示されており、例えば仏教の現世否定という超越的本質を現世肯定的なものに変容させてしまうような、日本文化の根源的な傾向を指している。これと似た概念に、丸山眞男の「執拗低音basso ostinato」があるが⁽²⁾、丸山は「原型・古層・執拗低音——日

⁽²⁾ この概念で丸山は、外来文化の圧倒的な影響にもかかわらず、執拗に残存する「日本的なもの」を表現し、外来思想を主旋律とするならば、「それがそのままひびかないで、低音部に執拗にくりかえされる一定の音型によってモディファイされ、それとまざり合って響き」(丸山 1984: 152)、またある場合には「表面に隆起してメロディとしてはっきりききとれ、ある場合には異質の主旋律に押されて輪郭が定かでないほど「底に」もぐってしまう」(同153)としている。

本思想史方法論についての私の歩み——」(丸山 1984)のなかで、この元となる「原型」というアイデアを思いついたのは1963年頃としており、特にベラーについては言及していない。このことから、恐らくこの二つの概念に直接の関係はないと思われるが、両者がほぼ同時期に類似した概念を発想しているという事実は興味深い。

だがここで注目したいのは、丸山が日本文化の「原型」を強調したのに対し、ベラーはそれと同時に原型を超越しようとするもう一つの伝統が存在すると主張した点である。この議論は本書の第5・7章にもあらわれている。具体的な内容はこれから紹介する序文と重なるので省くが、そこで示された要素を著者は「隠れた超越性の伝統」と名付け、「基礎低音」に対置している。さらに、この両者を世界的な比較の文脈に位置づけるために、著者は先述した「軸」という枠組を持ち出すのである。

以上のような概念や枠組を用いて日本文化の葛藤を次節以降みていくが、そもそも「基礎低音」などの概念は定義が困難なものであり、抽象的でわかりにくい性格であるように思われる。そこでこれらの概念の特徴を、本書評では便宜的に以下のように整理しておく。

基礎低音	隠れた超越性の伝統
非軸的	軸的
個別主義	普遍主義
現世肯定的	超越的、現世否定的
言葉によらない儀式、習慣	明文化された観念、制度
調和的未分化	個人主義的分化
超越的傾向の本質を抜き取る	基礎低音に挑戦する
下からの思考パターン	上からのイデオロギー
問われてはならない、暗黙的伝統	外国文化から批判的に摂取

3. 基礎低音と「隠れた超越性の伝統」の葛藤

これらの二つの伝統をめぐるダイナミックな葛藤としての日本史は、まず6世紀における大陸からの官僚制度や仏教文化の摂取に伴うそれらの「日本化」から描かれる。どちらも元々は軸的要素を持ったものだが、官僚制度は貴族による官位の世襲により有名無実化され、仏教も家永三郎が指摘するようにその本質である「否定の論理」が失われ、支配者の権威の正当化の道具、あるいは民衆にとっては現世肯定の宗教として発展した。この過

程は本書第1章で触れられている。

同様のことが、明治維新後の急激な西洋文化の摂取の際にも起こった。多くの制度において西洋的な基準が採用されたにもかかわらず、その非軸的基礎低音は神性と政府と国民が融合し、天皇がその三者を象徴するという形で維持された。さらに近代国家の徴とされる明治憲法も、天皇が臣民にそれを与えるという「儀式」によってこの形式を正当化した。

戦後史においても、同様のことが起こっている。アメリカ軍が直接軍政をしかず、マッカーサーは公的秩序のために天皇を残したため、日本という国の構造的な連続性が保たれた。その後実施された多くの民主主義的改革も、占領軍の圧力下でなされたものの、その過程では、日本人による制度の日本的解釈と変形が行われたのである。

葛藤があったのはこれらの時代だけではない。ベラーは『徳川時代の宗教』で扱った徳川時代についても、新たな歴史的視点を導入し、それは決して一般的な認識のように閉鎖的で停滞した時期ではなかったとする。比較的后期に入るまでは様々な主張が存在する余地があり、多少異なる文化に接触してもその本質を抜き取って、自らの伝統の中に吸収しながら日本文化は柔軟に変化した。しかし、キリシタンの弾圧に見られるように、自らの基礎を根底的に批判するものは徹底的に攻撃した。この基礎低音は普段は表面に姿を現さず、根拠や正当性を疑ってはならない暗黙の前提として日本文化に根付いていたのである。

このような軸的な文化や制度の輸入とその日本的変形には、何も抵抗がなかったわけではない。それぞれの時代において、その外国文化の軸的性質を正確に理解し、日本文化の非軸的な基礎低音に挑戦しようとした知識人や宗教家が存在したのである。それがベラーの言う「隠れた超越性の伝統」である。しかし、彼らの試みはすべて基礎低音との対決に敗れ、結局はその非軸的構造を強化することにつながった¹³⁾。

第二次世界大戦の敗戦に至る歴史の過程は、この基礎低音がネガティブな形で結晶化していった例である。明治期に確立した天皇制は、昭和期にいたってファシズム的特質を示すようになったと一般にはされているが、それは必ずしも上からのイデオロギーの押し付けによるのではなく、もともと民衆の間に強く根付いていた未分化的パターンに頼っていたとベラーは主張する。本書第6章は、無限の受容と無限の柔軟性という性質を持つ「母としての天皇像」に注目しながら、このパターンが日本人にいかに関与されてきたかを説明するものである。これは丸山が「空の袋」と呼び、政治的行為の責任を置くことを

¹³⁾ 本書第1章で紹介される鎌倉仏教の開祖たちがこのような伝統の代表であり、また家永三郎についての第2章も「文化上の突然変異を代表するような物の考え方」としてこの伝統を日本史の中に発見する試みだった。

困難にしていると苛立たせたものだったが、ベラーはその高度に柔軟でダイナミックな側面にも言及し、それは強力な創造力と革新的な潜在性を持つと評価している。

そしてこの伝統は今日においても生き続けている。ベラーは今日では国民の多くが天皇に無関心であるというデータに触れ、天皇なしの天皇制が現実味を持ってきたと指摘する。その一方で、昭和天皇の死をとりあげ、その際のマスコミの過度の報道、あるいは「自主規制」に注目する。なかでも明治学院大学学長が、天皇が亡くなっても特別な行動はとらないことを宣言し、右翼の反感をかったことが挙げられる。このように天皇が存在すると同時に不在であることを示すような事態は、丸山が「小さな天皇制」と呼んだものであり、フーコーの「権力のミクロな構造」に似ている。ベラーはこれをあまり健康的な状態ではないと批判するが、今後もこの非軸的パターンは維持され続けるだろうと予測している。

結論——なぜ今再び日本について語るのか

『徳川時代の宗教』において、アジアのなかでも特に日本が資本主義的近代化に成功した理由を、プロテスタンティズムの機能的等価物の発見によって説明しようとしたベラーは、日本文化の「個性性」を強調する丸山に対し、そこには超越性（本書でいう軸的文化）の伝統もまた存在したと主張することで応えてきた。これは彼があくまでも比較的観点をとってきたためだが、近代化の精神的内実への反省から、これら二つの伝統の葛藤に注目することで、日本の文化形成をダイナミックに描いたのが本書の特徴である。

もっとも丸山が音楽用語からヒントを得た執拗低音という概念も、変化と持続性のジレンマをも含意していた。だがそのみでは結果的に日本文化の個性を強調するにとどまり、それを世界史的な比較の枠組に位置付けられない。本書のベラーの独自性は、丸山の批判を受けて日本文化の個性（基礎低音）を顧みつつ、それを自らの隠れた超越性の伝統という概念を媒介にして、アイゼンシュタットの「軸」概念に結びつけた点である。もしこの媒介がなければ、日本は依然「軸以前」の文明ということになってしまうが、著者は現在に至る軸文化と非軸文化の葛藤を指摘することで、この比較枠組をより柔軟に運用することを可能にしたと言える。

ところで、本書では比較のための枠組を発展させることが第一の目的なので、具体的な比較はあまりなされていない。しかし、序文の終わり、ベラーは近代化の病理を指摘し、そのグローバルな自己破壊を先導している日本とアメリカを比較している。日本では超越的現実と社会的現実の緊張が導入されてこなかった一方、アメリカでは近代化を完了したという暗黙の自己意識により、自らの近代化への批判的な評価がなされてこなかった。こ

の二者の間には、国家と国民を聖なるもの＝否定できない前提として定義するという意外な類似性が存在し、すなわちその問題も共有しているのである。

このように考えると、ベラーがなぜ今再び日本について語るのかも自ずと明らかになる。彼が今最大の問題とする近代化の病理は、まさに日本がその近代化の過程において葛藤してきたことなのである。本書ではベラーはかつてのように日本の近代化を「演繹的」に説明するのではなく、その個別的な立場から出発して、近代化という概念や機能的説明という枠組自体を内在的に批判し、かつそれを発展させたのである。

今後はこの修正された枠組を使って、いかに具体的な比較を行うのが課題となる。日本とアメリカが類似した性質の問題を抱えているとして、その解決もまた同様であると考えることができるのか。日本は今後も維持されるであろう非軸的なパターンのなかで、いかにこの問題を乗り越えていくことができるのか。軸という準拠点を振り返る＝超越性の獲得、あるいは回復がその克服の方法として本当に妥当なのか。このような検討を重ねることによって、本書で示された枠組をさらに彫琢していくことが重要になるだろう。

引用・参考文献

- Bellah, Robert Neely, 1962, "Values and Social Change in Modern Japan," 『国際基督教大学学報. III-A, アジア文化研究 3』 (=1970、大塚信一・大和田康之訳「近代日本における価値意識と社会変革」武田清子編『比較近代化論』未来社、95-163)
- , 1965a, "Japan's Cultural Identity," *Journal of Asian Studies* 24, no. 4: 573-94 (=1974、「和辻哲郎論」梅原猛編『近代日本思想大系25 和辻哲郎集』筑摩書房、381-408)
- , 1965b, "Ienaga Saburo and the Search for Meaning in Modern Japan," Marius E. Jansen, ed. *Changing Japanese Attitudes toward Modernization*, Princeton, N. J.: Princeton University Press: 369-423 (=1968、河合秀和訳「家永三郎と近代日本における意味の追求」細谷千博訳『日本における近代化の問題』岩波書店、269-326)
- , 1985, *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan*, New York: Free Press (=1996、池田昭訳『徳川時代の宗教』岩波書店)
- ベラー、ロバート、1996、「学者丸山眞男と友人丸山眞男」『みすず』427号: 11-13
- Eisenstadt, Shmuel Noah, 1996, *Japanese Civilization: a Comparative View*, Chicago: University of Chicago Press (=2004、梅津順一・柏岡富英訳『日本 比較文明論的考察』全3巻、岩波書店)
- , 1998, "Axial and Non-Axial Civilizations —The Japanese Experience in a Comparative Perspective— The Construction of Generalized Particularistic Trust" (=2003、柏岡富英訳「軸文明と非軸文明——比較日本文明論——」『思想』No.953、70-88)
- 丸山眞男、1958、「ベラー「徳川時代の宗教」について」『丸山眞男集第七巻』岩波書店
- , 1984、「原型・古層・執拗低音——日本思想史方法論についての私の歩み——」『丸山眞男集第十二巻』岩波書店

(きむら しせい・修士課程)